

ユカタン・マヤ語文法の流用と領有

吉田 栄人

はじめに

メキシコ国ユカタン半島の三州（ユカタン州、カンペチェ州、キンタナロー州）では現在マヤ文化の復権ならびにマヤ語¹の普及が国家および州政府の手によって積極的に推し進められている。ところが、その復興・普及活動においてどのようなマヤ語が実際に復興ないしは普及させられるべきかという点に関して議論されることはほとんどない²。それは一つには、ユカタンのマヤ語には文法レベルでの地域差がほとんどないことが、敢えて標準マヤ語を策定する必要性を感じさせないためなのかもしれない。だがそれ以上に、マヤ語話者およびその潜在的話者（マヤ語を母語として習得できなかったがマヤ人としてのアイデンティティを持ち、場合によってはマヤ語を習得する可能性を持つ人々）が実際に使用している言語を今後も使用し続けられるようにすることが復興活動の主たる目的であるため、復興・普及すべきは失われつつある所与の言語であるという認識が強く働いているように筆者には思われる。結果として、言語モデルに関する議論は行われないうまま、復興・普及運動に携わる人たち—そのほとんどはマヤ語のネイティブ話者である—が実際に用いる口語が復興・普及される言語のモデルとなっていく傾向にある。

しかし、マヤ語の復興・普及活動では、単に既存のマヤ語話者自身がその日常的な実践を拡大させるだけでなく、利用可能なマヤ語の音声やテキストの流通量を増やしたり、マヤ語使用者の数を増やすためにマヤ語の教育を行うといったことも必要である。それは、復興・普及活動にはマヤの人々の日常的な生活からはかけ離れた専門的なあるいは高度な教育を受けた人材が必要であることを意味している。復権が、単に失われた伝統や文化を取り戻すことではなく、むしろ現在を生きるマヤの人々が持っているべき権利や機会を回復することを目的としたものであるという点では、グローバルな知識や情報をマヤ語に翻訳するといった作業もマヤ語の復興・普及活動の主要な一部となってくる。そういう意味ではマヤ語の復興・普及とは、失われた過去のマヤ語を復活させることではなく、マヤ語そのものを近代化する作業に他ならない。

そのマヤ語の近代化に携わる人たちの実践がそのまま復興・普及マヤ語の雛形となっていく状況にあって、彼らが統一された言語モデルあるいは適切な言語モデルを持っていないとすれば、それは復興・

¹ 言語学では通常、yucatec maya（スペイン語ではmaya yucateco）と呼ばれるが、これは「ユカタンのマヤ語」という意味であるため、本稿ではユカタン・マヤ語という名称を用いる。なお、ユカタン・マヤ語は同語では単にマヤ（*maaya*）語と呼ばれるので、本稿では以下単にマヤ語と呼ぶものとする。このマヤ語を他のマヤ系言語から区別する必要がある場合にだけ、ユカタン・マヤ語という名称を用いることとする。

² 植民地時代より様々な表記法が存在するため、どの表記法を採用するかに関する議論は行われてきた。詳細についてはBrody (2004) を参照。

普及活動の妨げにならないとも限らない。また、活動が拡大すればするほど、大量の人材が必要となる。しかし、活動に必要な知識と能力を持った人材がすでに多数存在するわけでもない。そうした人材はこれから教育によって育てていかねばならない状況にある。そうした将来の人材の育成には一定のビジョンに支えられた共通の、しかも適切な言語モデルが不可欠であるはずだ。

本稿では、マヤ語の復興活動(近代化)において用いるべき言語モデルを構築するための前段階として、現在マヤ語の復興・普及活動の主要な担い手となっているネイティブのマヤ語話者がどのような言語モデルを持っているのかについて検討しておきたい。言語モデルを論じるに当たっては表記法や外来語の使用法など議論すべき論点はいくつかあるが、ここでは文法(その中でも主に統語法のベースとなる動詞)に焦点を当てることとする。

1. スペイン語によるマヤ語文法の領有

キリスト教会(カトリック)ならびに修道会はユカタンでの布教活動を行うにあたって先住民の言語であるマヤ語を積極的に使用した。そのため、公教要理や典礼に必要な祈祷文などがマヤ語に翻訳され、またマヤ語の学習に必要な語彙集や文法書も作成された。しかし、宣教師たちが作成したマヤ語文法書はラテン語およびスペイン語の文法をモデルとして作成されたものであったため、ラテン語やスペイン語に存在しないマヤ語固有の文法的規則は理解さえされなかった。時にはスペイン語の文法概念に対応させるため、不自然なマヤ語が作り出されることさえあった(cf. Tozzer 1977: 8)。

マヤ語文法が非マヤ語話者にマヤ語文の生成規則を説明するためのものである限りにおいて、非マヤ語話者、特にユカタンにおけるマヤ語教育の対象となる人々の言語、すなわちスペイン語の文法概念を用いることは不可避であるし、またそこには一定程度の合理性も存在する。スペイン語の文法概念を用いてマヤ語文の生成規則を説明するマヤ語話者(教師)が、そうしたマヤ語文法書の欠陥を承知しているのであれば、スペイン語文の生成規則とマヤ語文の生成規則の違いについて補足説明をすることも可能であるだろう。だが、現代においてさえ、ネイティブのマヤ語話者から見たマヤ語文の生成規則を統一的に説明したマヤ語文法書は残念ながら存在しない³。本来であれば、いわゆるマヤ語文法書がそうしたマヤ語文の生成規則に関する説明書でなければならないのだが、マヤ語文法書は植民地時代以来今日に至るまでずっとスペイン語文の生成規則との不完全な対応表でしかなかった。非マヤ語話者のために作られたマヤ語文法書の過ちをマヤ語のネイティブ話者がこれまで修正できなかったからである。それは、マヤ語話者が文法を語るのに必要な言語と知識にアクセスすることがこれまで困難であったことに加え、アクセスできた場合であっても、その言語と知識がスペイン語などの非マヤ語の論理によって構築されたものであったからである。マヤ語はユカタンにおいては常にスペイン語に領有されており、その

³ マヤ語ネイティブがマヤ語話者のためにマヤ語で執筆したマヤ語文法書なるものはまだ著わされたことがない。言語学者の手によるマヤ語文法も、後述するとおり、スペイン語ないしは英語によってそれらの言語話者のために執筆されたものであり、必ずしもマヤ語本来の文派生規則を正確に記述できているわけではない。

スペイン語の文法概念を流用する形でしか、マヤ語文法を語ることはできなかったのである。では実際、マヤ語はスペイン語によってどのように領有されてきたのか、次にその具体例を見ていくことにしよう。

(1) 宣教師によるマヤ語文法

植民地時代に作成された先住民言語の文法書は、マヤ語の場合に限らず全ての言語において、スペイン語の動詞変化に対応する変化形を記載する形を取っている。スペイン語の動詞変化は人称に加えて時制と叙法を表示する。この時制と叙法の組み合わせによって、スペイン語動詞は直接法現在、直接法線過去、直接法点過去、直接法未来、直接法過去未来、接続法現在、接続法過去の活用形を持つ。これらの活用形に、命令形、過去分詞、現在分詞、不定詞（原形）、さらには過去分詞もしくは現在分詞を用いた複合時制を加えれば、動詞変化の一覧表が完成する。このスペイン語動詞の活用一覧表に各言語の動詞の活用形を書き入れることが、植民地時代における文法書作成の基本的作法であったのである。

次の表は1684年に出版されたGabriel de San Buenaventuraの*Arte de la lengua maya*⁴から、そうした活用形のうち主要なものだけを抜き出したものである。なお、マヤ語は動詞の活用際に人称代名詞が組み込まれるため、各時制に6つの活用形が存在することになるが、この表には1人称単数の形だけを記載した。*in*と*en*がその人称代名詞である。*in*は他動詞の全てのアスペクトと自動詞の継続相においてエージェントを表わす。また、*en*は継続相以外のアスペクトにおいて自動詞のエージェントを表わす。ただし、こうした事実は植民地時代にはまだ理解されていなかった。

Gabriel de San Buenaventura (1684年) によるマヤ語動詞活用

	第1活用 ("登る")	第2活用 ("教える")	第3活用 ("敬う")	第4活用 ("面倒を見る")
直 説 法 現 在	<u>nacal</u> in cah	<u>cambesah</u> in cah	<u>dzic</u> in cah	<u>canan</u> in cah
直 説 法 線 過 去	<u>nacal</u> in cah <u>cuchi</u>	<u>cambesah</u> in cah <u>cuchi</u>	<u>dzic</u> in cah <u>cuchi</u>	<u>canan</u> in cah <u>cuchi</u>
直 説 法 点 過 去	<u>nac</u> en	in <u>cambesah</u>	in <u>dzicah</u>	in <u>canantah</u>
直 説 法 過 去 完 了	<u>nac</u> en ili <u>cuch</u>	in <u>cambesah</u> ili <u>cuch</u>	in <u>dzicah</u> ili <u>cuchi</u>	in <u>canantah</u> ili <u>cuchi</u>
直 説 法 未 来	bin <u>nacac</u> en	bin in <u>cambes</u>	bin in <u>dzicib</u>	bin in <u>canante</u>
直 説 法 未 来 完 了	<u>nac</u> en ili <u>cuchom</u>	in <u>cambesah</u> ili <u>cochom</u>	in <u>dzicah</u> ili <u>cuchom</u>	in <u>canantah</u> ili <u>cochom</u>
接 続 法 現 在	cat <u>nacac</u> en	cat in <u>cambes</u>	cat in <u>dzicib</u>	cat in <u>canante</u>
接 続 法 過 去	hi <u>nacac</u> en	hi in <u>cambes</u>	hi in <u>dzicib</u>	hi in <u>canante</u>
命 令	<u>nacen</u>	<u>cambes</u>	<u>dzici</u>	<u>canante</u>

⁴ 一番最初にマヤ語の文法書を作成したのはVillalpando司祭(1551年もしくは1552年没)であったとされる。その文法書は出版されることなく、しかも現物は消失している。しかし、1620年にJuan Coronelが出版したマヤ語文法書はこのビジュアルバンドの文法書をベースにしているとされる。また、ここで取り上げるブエナビントウーラの動詞活用はコロネルのものと共通である。次に取り上げるベルトランはこのブエナビントウーラの文法書を批判検討の対象としているので、本稿ではブエナビントウーラの文法をもって初期マヤ語文法とする。

活用形はいみじくも複数の単語に切り分けた形で記載されているが、たとえば、*cuchom*や*hi*、*bin*は動詞のアスペクトを表す副詞、また*cat*は接続詞であり、必ずしも動詞の変化形の一部とは言えないものである。さらには、第4活用の未来形および命令形は*canante*となっているが、語末の*e*は文の末尾を表す終辞である。直説法線過去や直説法過去完了に現れる*cuchi*の語末の*i*も同様に文の末尾を表す終辞である。すなわち、動詞変化の一覧表に記された動詞の変化形は動詞単体の活用形というよりは対応するスペイン語動詞の活用形が持つ意味を得るために必要な最小限の文であると考えるのが妥当である。そうした副詞などの文としての構成要素を取り除いたものが動詞の本来の活用形であるとするならば、マヤ語動詞の活用形は下線部だけを一覧表にすれば済むことになる。そうした観点からこの表をもう一度見直せば、マヤ語動詞の活用形は4つほどしかないことが分かるはずである。たとえば、第1活用の*nacal*は*nacal*、*nac*、*nacac*、*nacen*に整理できる⁵。そうした活用形に時制や叙法などを表す副詞のような何らかの要素が付け加えられることで意味が確定されるのである。しかし、宣教師たちはスペイン語動詞の活用形に対応するマヤ語を一元的に追求したため、動詞の活用と意味の確定（文の派生）を段階的な別個のプロセスとして捉えようとはしなかったのである。

宣教師たちの動詞活用表の欠陥はこれだけに止まらない。この一覧表にはある大きな矛盾が存在する。第1活用は自動詞であるのに対し、残りの第2活用、第3活用、第4活用はすべて他動詞である⁶。ところが、第2、第3、第4活用では、直説法現在形と直説法線過去形として記載されているのは目的格が明示されない絶対格の形である。ということは、目的語を必ず表示する他動詞能動態の直接法現在形と直説法線過去形が存在するはずである。だが、この一覧表にはそれが記載されていない。また、直説法現在形と直説法線過去形以外にも絶対格の用法はあっていいはずだが、それも記載されていない。

Pedro Beltrán de Santa Rosa María (1746年) による修正点

	第1活用	第2活用	第3活用	第4活用
直説法現在	nacal in cah	ten cambesic	ten dzicic in cah	ten canantic in cah
直説法線過去	nacal in cah cuchi	ten cambesic cuchi	ten dzicic cuchi	ten canantic cuchi

Pedro Beltrán de Santa Rosa Maríaは1746年出版の*Arte del idioma maya*の中で、この初期マヤ語文法が犯した動詞活用システムの不備を解消しようとする。ただし、ベルトランはその修正を時間の経過によってマヤ語自体が変化したことによるものだと説明し、初期マヤ語文法が間違っていたとは表立っては主張していない。ベルトランが初期マヤ語文法で修正を加えた主要な箇所はまさに直接法現在と直説法線過去であった。ベルトランの活用一覧表では第2活用・第3活用・第4活用、すなわち他動詞に関して、目的語が表示されない絶対格ではなく、目的語が必ず現れる能動態の活用形が記載された。結果的

⁵ 実際には、さらにもう一つ*nacaan*がある。

⁶ 他動詞は第3活用を基本形とみなし、それとの違いによって第2活用と第4活用が決定する。他動詞は点過去では語根に接尾辞-ahが付加されるが、その前にtが付加されるのが第4活用、直接法現在形と点過去形が同型になるものが第2活用である。なお、自動詞と他動詞の区別に関しては脚注7を参照。

に、動詞活用一覧表自体には他動詞の絶対格と他動詞の能動態が混在するという事態は解消されたと言える。しかし、それは一方で絶対格という動詞の活用システムをマヤ語文法からほとんど見えなくしてしまうことに等しいものであり、対格言語であるスペイン語文法によってマヤ語文法が完全に領有された瞬間であったと言っても過言ではない。

マヤ語動詞の活用システムをめぐる他動詞における絶対格の存在は、現代言語学に能格および逆受動態という文法概念が導入されることで漸く解明されることになるのだが、そうした文法概念を知らない人にとっては、現在でもマヤ語の動詞活用を説明する上での大きな障害となっている。それはまさにマヤ語文法を扱う人たちの発想が対格言語であるスペイン語によって完全に領有されてしまっているからに他ならない。

(2) 現代の言語学者によるマヤ語文法

現代の言語学者であっても自らの言語に基づいた知識から必ずしも自由である訳ではない。特に、英語の文法を一つの分析モデルとする生成文法学派において顕著である。たとえば、Krämer and Wunderlich (1999) はユカタン・マヤ語の自動詞は本来的未完了自動詞と本来的完了自動詞の二つに分けることができると主張する。実際の動詞活用において、前者のグループでは未完了（継続）相で一切接辞がないのに対し、完了相にnが現れる。一方、後者のグループでは未完了相で-VI（Vは語根の母音と同じ母音）が接辞するのに対し、完了相では接辞が一切ない。そして、これらの自動詞が他動詞化される場合⁷、前者にはtが、後者にはsが接辞する。クレイマーとヴンデルリッヒは、本来的未完了自動詞は他動詞（能動態）化する場合、θ役割を持った内項が接辞tとして現れるのに対して、本来的完了自動詞では外項を新たに付与することで他動詞化するとみなす。つまり、彼らは本来的未完了自動詞はアーギュメントに内項（目的語）を持つ動詞であると主張する。ところが、本来的完了自動詞に入る *hanal*（食べる）は接辞tをとる。これに対してクレイマーらは、*hanal*は形態上は内項を持たない本来的完了自動詞であるが、何らかの対象物を含意した動詞であるため、他動詞化する場合には接辞tが現れるのだ、

⁷ ユカタン・マヤ語では、他動詞の能動態は主語に能格（マヤ語学ではA代名詞と呼ばれる）を要求するのに対し、自動詞の主語には絶対格（B代名詞）が用いられる。ここではこのB代名詞が用いられる他動詞の全ての態を含めて「自動詞」と呼んでいる。実際、多くのマヤ語文法書でもこれらをまとめて自動詞と呼んでいる。なお、クレイマーとヴンデルリッヒが本来的未完了自動詞と呼んでいる動詞は逆受動態をデフォルトとする動詞である。

他動詞性	他動詞				自動詞
態	能動態	逆受動態	中間態	受動態	
能格性	能格	絶対格			
A代名詞	主語	主語（継続相）			
B代名詞	目的語	主語（継続相以外）			

と主張する⁸。しかし、これは「食べる」という動詞は対象物（目的語）を必要とする動作を表したものである、という英語もしくはスペイン語の意味論的発想に基づいたものでしかないはずである。また一方で、クレイマーらが本来的未完了自動詞に分類する *xik'nal*（羽ばたく）や *aalk'ab*（走る）という動詞をマヤ語話者が使うとき、彼らは一体どんな目的語（内項）を想定しているというのだろうか。他動詞は意味論的に必ず対象物（内項）を要求するという発想は対格言語に特有のものではなからうか。

動詞レベルにおける目的語のマーキングを意味論的に解釈する必要性は必ずしもないはずである。それはあくまで構文上の規則に過ぎない。そこに意味論的な解釈（LF表示）を持ち込もうとするのは、言語学の用語を使用しつつも、結局は分析者が自らの言語の意味論的枠組みによって対象言語を領有しようとする行為に他ならないはずである。日本語文法でも英語をベースとした言語学的枠組みによるそうした領有がすでに広範に起きている。たとえば、「私はもっと時間が欲しい」といった文において「私」が主語（外項）で「時間」が目的語（内項）であるといった解釈に多くの日本人はもはやほとんど疑問を抱かなくなっている。この場合の助詞の「が」は対格（内項）を表すという解釈が加えられるだけで、通常それ以上の思考は停止する。これは問題の日本語文を英語文の *I want more time.* に置き換えることで、大抵の人は納得してしまうためである。日本語話者であるのに「時間」と「欲しい」との間に存在する日本語本来の統語論的繋がりを英語を介してしか説明できないのである。マヤ語でも今まさにそうした英語をベースとした言語学的知識による文法の新たな領有が行われようとしている。

2. スペイン語に領有されたマヤ語の日常的実践

これまで見てきたマヤ語文法とはあくまでマヤ語の文生成規則を理解する上での非マヤ語話者の視点でしかない。では、マヤ語話者の日常的な実践レベルから見たときに、マヤ語は実際のところ、スペイン語によってどれだけ領有されているのであろうか。

(1) 借用語

スペインによる植民地支配を受ける中でスペイン語はまず語彙レベルでマヤ語話者の日常生活に組み込まれていったはずである。マヤ語世界には元々存在しなかったスペイン由来のものや概念は翻訳されずに、そのまま借用語としてマヤ語の語彙の中に組み込まれるものも多くあった。スペイン語世界との接触が多くなればなるほど、マヤ語の語彙目録にスペイン語からの借用語が占める割合も高くなるだろう。しかしながら、スペイン語からの借用語であるからといって、スペイン語のままである訳ではない。まず、マヤ語の音韻的制約と調音の特徴によってマヤ語化される。マヤ語では一般に語末から二番目の

⁸ 動詞 *hanal* は現在一般には通常の自動詞と同じ活用をされるとされるが、Fidencio Briceño Chel (2006) のように逆受動態と見る考え方がないわけではない。仮に動詞 *hanal* が逆受動態、すなわち本来的未完了自動詞だとすれば、他動詞化する際に接辞 *t* が現れるのは当然であり、クレイマーらの主張は間違っていない。ただ、*hanal* はその活用が何らかの理由で自動詞タイプになっているだけであり、極めて例外的であり、その他の全てに彼らの主張が適用可能なわけではない。

母音が下がり調の長母音となり、また最後の母音が声門閉鎖音化する傾向にある。そのため、たとえば、dios (神) は dios のように発音される。また、マヤ語の文生成規則の適用を受けるため、様々な接尾辞が付加される。たとえば、cristiano (キリスト教徒) の複数形はスペイン語では cristianos だがマヤ語では *cristiano'ob* もしくは *cristianoso'ob* のように複数を表す接尾辞 -o'ob が付加される。また、名詞化接尾辞の -il を付加することによって *cristianoil* (キリスト教) といった造語も行われる。

借用語は名詞だけに限らず、動詞や形容詞、副詞などでも行われる。スペイン語の動詞の借用にあたっては原形 (不定詞) が語根としてマヤ語動詞の活用システムの中に取り入れられるのだが、その際それが自動詞であるか他動詞であるかに関わりなく、すべての借用語動詞は逆受動態 (クレイマーとヴェンデルリッヒの分類で言えば、本来の未完了自動詞) として扱われる。それゆえ、他動詞として用いるときには接尾辞の t が必ず付加される。例えば、次の文の中の *invitar* (招待する) はスペイン語では他動詞であるが、*invitartik* のように *invitar* に接尾辞 t と未完了アスペクトを表す -ik が付いている。

Jun p'éel k'iine'ka tu tukultaj yuum reey u invitartik u chukaan reeyo'ob.

「ある日、(王は) 他の王たちを招待しようと思った。」(Andrade y Maas Colli, 1991:326)

こうした事例から明らかなように、マヤ語はスペイン語の語彙を多数借用 (流用) していくものの、マヤ語固有の文生成規則が働くことで、マヤ語本来の語彙であるかのような扱いが可能となるのである。しかし、こうしたスペイン語語彙のマヤ語語彙目録⁹への流用はその語彙数が増大するにつれて、マヤ語話者コミュニティにおけるスペイン語とマヤ語の二言語併用 (ディグロシアおよびバイリンガリズム) の増大とも相まって、マヤ語の文法構造そのものを変化させる要因ともなりうる。

(2) 文法構造および音韻体系の変化

スペイン語の語彙がマヤ語に取り込まれる一方で、マヤ語話者がスペイン語の文法規則を習得することによってマヤ語そのものの文法規則が変化する場合もある。特に顕著なのが語順である。ユカタン・マヤ語の基本語順は VOS (動詞—目的語—主語) であるのに対し、スペイン語では、主語の位置は比較的自由であるが、SVO が基本語順である。そのためマヤ語でも主語を動詞に前置した文型が規範的であるとする考えが広まりつつある (八杉 2003)。

また、文字表記されたマヤ語をスペイン語読みすることによって、マヤ語には本来存在しない音価がマヤ語の音体系に組み込まれてしまうことも起きている。たとえば、INDEMAYA (ユカタン州マヤ文化振興協会) が運営していたマヤ語によるラジオ放送局の名称 *Yóol Iik'* (風の魂) は、本来であれば「ヨール・

⁹ マヤ語辞書を作成するにあたって、*laapis* (鉛筆) といったスペイン語 (*lápiz*) からの借用語は通常は記載されない。しかし、*laapis* に代わるマヤ語は存在しない。*laapis* がすでにマヤの人々の生活には不可欠は語彙目録なのであれば、外来語で溢れている日本語の国語辞典がそうであるように、そうした借用語もマヤ語辞書には記載すべきであろう。

イーク」であるが、しばしば「ジョール・イーク」と発音されていた。マヤ語の音体系にはジャ行の音は存在しないが、スペイン語ではyの文字はジャ行で発音される傾向にあるため、「ジョール・イーク」はスペイン語式の読み方がなされたマヤ語であると言えるし、マヤ語話者はこうした読み方に違和感すら感じなくなっているばかりか、文字を読むわけでもない通常の会話においてさえ、yが生起する単語をジャ行で発音してしまうといった事態まで生じている。

マヤ語の復興・普及活動を通じて今日大量のマヤ語テキストが流通するようになってきた。しかし、マヤ語の表記法ははまだ確定しているわけではないし、またマヤ語の表記法に関する教育もこれまでほとんど行われてこなかった。これまでの学校教育では、仮にマヤ語を教えることがあったとしても、それはスペイン語の読み書きができるようにするための手段としての便宜的な利用でしかなかった。すなわち、文字の学習のために一時的にマヤ語が利用されるだけであり、マヤ語をどのように表記するかは大きな問題ではなかった。むしろ、スペイン語の読み書きをするのに必要な最低限のアルファベットさえ覚えられれば、それでよかった。こうした状況の中では、マヤ語のテキストはスペイン語式で音読されてしまいがちである。そしてそうした発音が正しいものとして、文字が読めないマヤ語話者にまで定着してしまうのである。

(3) スペイン語式マヤ語文法

マヤ語の復興・普及活動には、マヤ語のテキストや辞書、文法書の整備が必要不可欠である。ところが、現在流通しているそうした教材、特に文法書はスペイン語などのマヤ語ではない言語の論理に基づいたものである。ネイティブのマヤ語話者たちはそうした既存のマヤ語文法が抱える構造的欠陥を必ずしも修正できている訳ではない。むしろ、彼らは既存のマヤ語文法による枠組みを再生産してしまう傾向にある。彼らのマヤ語に関する文法的知識はスペイン語に領有されたままなのである。

これにはいくつかの要因が作用している。ひとつは、マヤ語の学習者がスペイン語話者である場合には、スペイン語の文法的枠組みを用いることは入門レベルにおいては有効であるということ。また、マヤ語話者に対するマヤ語の教育であっても、彼らはスペイン語が支配的な社会で暮らしていかざるを得ない以上、彼らへのマヤ語教育においてスペイン語の知識を流用することは一石二鳥の効果があると人々は考えがちであること。特に、マヤ語話者の子供たちに対する教育を担当するインディヘニスタ教師たちの多くは、子供時代に先住民言語に対する差別を体験してきた世代であり、またスペイン語の習得を前提としたバイリンガル教育を一時期担わされてきた人々であるため、マヤ語の文法がスペイン語の文法に依拠していることに対して疑問を抱くことはほとんどない。

マヤ語教育の現場で実際に使用されることを目的として作成されたマヤ語文法の例として、インディヘニスタ教師たちが中心となって作成された *Curso de gramática maya* (1999) を見てみよう。

同書の序文には次のように書かれている。多少長くなるが、マヤ語話者たちがスペイン語によるマヤ語文法の領有という現象から抜け出すことがいかに困難であるかを物語る重要な事例であるので、引用

しておきたい。

「文法とはある言語によって立つ規則に関する研究である。また一方で、特にマヤ語の文法を扱う場合には、それは言語としての歴史的発展やこれまでに被った変化にも必然的に触れなければならない。なぜなら、マヤ語は継続性が見られる言語であり、それゆえに、文法的に正しくあるためにはその使用にあたって、すでに確立され、また受け入れられている規則を明らかにしなければならないからである。

こうした基本的な考えから、文法関連の重要な文献を再読する必要性が生じた。たとえば、Audomaro Molina Solís、Paulino Novelo Erosa、Daniel López Otero、Alfredo Barrera Vásquez、Santiago Pacheco Cruz、Antonio Mediz Bolio、Nemesio Barrera、Juan Ramón Vega、Mauricio Zavala たちの文法である。またこうした古典的な作家に加えて、Refugio Vermont Salas や Eleuterio Poot Yah、José Manuel Tec Tun らによる文法的記述も加える必要があるだろう。

こうした文献の再読と研究は、ユカタン自治大学が教育学部で行ったマヤ語文法とマヤ文化に関するセミナーに関連して、あるインディヘニスタ教師たちのグループが助言を求めてきたことに端を発した。

マヤ語文法の学習書としては、その制約を踏まえても、非常に実りあるものとなったと言えるだろう。この学習書作成に加わった教師たちは現在のマヤ語を完璧に話せる人たちであり、その意味でも文法事項を完全に網羅した基礎的な練習ができる学習書として仕上がっている。本書はマヤ語文法に今一度正統性をもたらすという点で貴重なものである。」(Quintal Martín 1999: iii)

序文を書いたキンタルには、既存のマヤ語文法書はスペイン語文法によって領有されたものであり、マヤ語固有の論理を明確に説明できていないといった認識は全くない。既存のマヤ語文法を再読する場合でもそういった観点から批判的に読み直すのではなく、そこに用いられた概念的枠組みを跡づけ理解した上で、それに基づいて現代のマヤ語の文法を整理せよ、というのが、彼がインディヘニスタ教師たちに与えた助言だったことすら、この序文から伺い知れる。古いマヤ語文法書に書かれたマヤ語と現代のマヤ語との間に何らかの違いがあるとすれば、それはマヤ語文法書の記述が間違っていたためではなく、現代のマヤ語がそれが書かれた時代のマヤ語から変化してしまったためであるというのが彼の認識のようだ。

では、そうした既存のマヤ語文法書を検討することからマヤ語話者であるインディヘニスタ教師たちが導きだした現代マヤ語の文法規則はどのようなものだったのであろうか。彼らが作成したマヤ語教本の中でも動詞活用システムの項に注目してみよう。

Curso de gramática maya は、マヤ語の動詞には直接法、接続法、命令法、不定法の4つの法を設定した上で、次の時制に関する動詞の活用事例をあげている。なお、本稿では活用事例として1人称単数の場合だけを紹介しておく。

継続現在	<i>Teen kin janal. / Teen kin jaantik.</i>
現在進行	<i>Taan in janal. / Taan in jaantik.</i>
過去	<i>Jaanen. / Tin jaantaj.</i>
直近過去	<i>Taant in janale'. / Taant in jaantike'.</i>
完了過去	<i>Ts'o'ok in janal. / Ts'o'ok in jaantik.</i>
継続過去	<i>Laayli' tin janale'. / Laayli' tin jaantike'.</i>
同時過去	<i>Kin janal ka'achi. / Kin jaantik ka'achi.</i>
完了過去	<i>Ts'o'okili' in janale'. / Ts'o'okili' in jaantike'.</i>
遠方未来	<i>Biin janaken. / Biin in jaantej.</i>
複合未来	<i>Le ken janaken. / Le ken in jaantej.</i>
強制未来	<i>Yaan in janal. / Yaan in jaantik.</i>
確實未来	<i>Je'el in janale'. / Je'el in jaantike'.</i>
連続未来	<i>Taan in janal wale'. / Taan in jaantik wale'.</i>
後方未来	<i>Ts'o'ok in janal wale'. / Ts'o'ok in jaantik wale'.</i>
完了現在	<i>Janaja'anen. / In jaantmaj.</i>
接続法現在	<i>Ka'aj in janaken. / Ka'aj in jaantej.</i>
接続法完了現在	<i>Janken inaj ka'achi. / Biin in jaant inaj ka'achi.</i>
二人称命令形	<i>Janen.</i>
不定形現在	<i>janal / jaantik</i>
不定形未来	<i>Yantal yuuchul janal. / Yantal yuuchu u jaanta'al.</i>
不定形過去	<i>Anjij uuchik janal. / Anjik yuuchul jaanta'al.</i>
現在分詞	<i>Tin janal in ka'aj. / Tin jaantik.</i>
未来分詞	<i>Antal u ka'aj in janal. / Antal u ka'aj in jaantik.</i>
過去分詞	<i>Anjij in janal. / Anjik in jaantik.</i>

この文法解説で特徴的なのは動詞の活用法がすべて文章で紹介されていることである。この文法解説はスペイン語の時制に比べると多少複雑になっている。直説法の過去形だけでも6つ、未来形も6つの活用法が紹介されている。その意味では、スペイン語の動詞活用に対応するマヤ語表現を記載した植民地時代のマヤ語文法とは少し異なる。マヤ語に関する言語学的研究が進む中で、マヤ語表現の多様性に対応するために新たな文法概念が次々と導入されてきた。そうした複雑化した新たな言語学的研究を再読したインディヘニスタ教師たちは、ネイティブとしてのマヤ語に関する知識を参照しつつ、それらの文法用語に対応するマヤ語表現をリストアップしたのが、彼らが作成したマヤ語教本なのである。

上のリストを見れば明白であるが、マヤ語動詞の変化形には同じものがいくつもある。異なるのは動

詞の前に置かれた *yaan* や *je'el* など助動詞的な役割を担っている様態辞である。本来であれば、これらの様態辞は動詞の活用システムそのものからは切り離して、マヤ語動詞の活用システムに関する説明をもっと簡略化してしまうことも可能なはずである。だが、スペイン語には助動詞という概念が希薄であるため、これらの様態辞が動詞の意味を変化させる接辞として解釈されることによって、こうしたマヤ語の活用に関する説明がある種の合理性を持つのだといえよう。しかし、それはマヤ語の動詞活用システムを説明したものであるというよりは、依然として動詞の活用形そのものに意味を直結させようとするスペイン語の文法的枠組みによるスペイン語とマヤ語の対応表でしかない。

インディヘニスタ教師たちは、マヤ語のネイティブ話者であっても、マヤ語の文生成規則を客観的に説明するための用語を持ち合わせていない。そのための十分な教育も受けていないはずだし、またそうした学術的用語ははまだスペイン語など非マヤ世界の占有物である。さらには、インディヘニスタ教師たちは既存のマヤ語文法を批判し、それとは全く異なる文法を提示する必要性を特に感じなかったのだろう。現在話されているマヤ語とスペイン語との対応表としての文法解説書を作成すること、すなわち植民地時代のマヤ語文法をアップデートすることが、彼らの望みだったと言っても構わないはずである。彼らにとってマヤ語の文法はあくまでスペイン語をモデルとしたものであり、しかもスペイン語文法との整合性を必要とする教育のための道具だったのだ。

しかし、そうしたマヤ語文法がマヤ語話者自身の文法的理解を阻害することになる、ある事例を紹介しておきたい。

筆者はユカタン州バジャドリ市（バジャドリ）のオリエンテ大学マヤ語マヤ文化コースの学生らの協力を得て「マヤ語動詞活用辞書」（Yoshida 2009）を作成した。その辞書作成に参加した学生たちはいずれもネイティブのマヤ語話者であり、また中にはマヤ語を教えた経験のある者も数名いた。辞書に記載する動詞の活用形を決定するに当たって、彼らは従来のマヤ語文法の枠組みを採用しようとした。というより、それ以外の方法は知らなかった。結局、筆者の提示する活用システムを理解してもらった上で、それぞれの動詞の活用形を確認するという作業を行った。ほとんどの活用形に関しては共通の理解が得られたものの中間態の結果相だけはなかなか特定ができなかった。まず、中間態が何であるかが理解できなかったのである。

ユカタン・マヤ語の CVC 型他動詞は語根母音 V が下がり調長母音、上がり調長母音、声門閉鎖音に変わること、それぞれ逆受動態、中間態、受動態に態変化する。具体例を示そう。次は「折る」という意味の他動詞 *kach* の場合である。

能動態：Tu *kachaj* u k'ab che' Jwaan. フアンが木の枝を折った。

逆受動態：Kaachnajib Juan. フアンが折った。

中間態：Kaach u k'ab che'. 木の枝が折れた。

受動態：Ka'ach u k'ab che' tumeen Jwaan. 木の枝が折られた（ファンによって）。

受動態が他動詞のペーシェントを主語にして焦点化（エージェントは斜格化）するのに対し、逆受動態はペーシェントを省略することによってエージェントの行為を焦点化する。中間態はエージェントによる行為がなくとも、行為の結果がペーシェントに起こる様を表すものである。その場合、ペーシェントが主語となる。たとえば、英語では *This paper paints well.*「この紙はよく書ける」、*The bank broke.*「銀行は破産した」などが中間態の例である。ところが、伝統的なマヤ語文法ではこうした他動詞の態変化メカニズムは一切論じられてこなかった。それは1970年代以降アメリカ人による現代言語学的な研究によって初めて明かにされたものであり、ユカタンのマヤ語研究者の間にもまだその概念的枠組みはあまり浸透していないのが現状である。

この中間態の活用メカニズムは分かっているのだが、どういうわけか、通常過去分詞と呼ばれる活用形に関してはどのような形になるのか明確に述べた研究が存在しない¹⁰。そこで、協力者であるマヤ語話者の大学生たちに中間態の過去分詞形を幾度も尋ねるのだが、なかなか要領を得た答えが得られない。ある学生は次のような事例を挙げた。

K'axa'anen yéetel jun p'éel suum. (中間態)

「私は一本のロープで縛られている」

K'axa'anen yéetel jun p'éel suum tumen in suku'un. (受動態)

「私は兄によって（一本のロープで）縛られている」

その理由をその学生は次のように説明した。「中間態の過去分詞は、おそらく受動態のそれと同一だ。それぞれの違いはコンテキストだ。もっと正確に言えば、行為を行うエージェントがあるかないかだ。」だが、これはおそらく間違いだ。彼が上げた例はいずれも受動態である。「私」と「結ぶ」(*k'ax*)との関係性を考えたときに、「私は結べる」のように「私」が「結ぶ」行為のペーシェントであり、かつそれが誰の助けも借りずに起こるとするのは少し無理のある論理である。この場合、「私」はあくまで「結ばれる」ことしかできないだろう。つまり、この学生が作った文においてエージェントが明示されようがされまいが、受動態の表現しかできないはずである。実際、すべての他動詞に中間態が存在する訳ではない。中間態が可能な動詞は意味論的に制限されるのである。

¹⁰ Ayres & Pfeiler の *Los verbos mayas* (1997) は、中間態の過去分詞には *CVC-a'an* と *CVVC-VI* (この場合の *VV* は下がり長母音) の二つがあるという。ブリッカーも *muk* (埋める) という他動詞の過去分詞形として、*muka'an* と *muukul* をあげている。そして、前者はエージェントを伴うのに対し、後者はエージェントを伴わないと書いている (Bricker, et al. 1998: 392)。彼女は中間態の過去分詞が *CVVCVI* の形を取るという説明はどこにもしていないが、この記述は受動態の過去分詞が *CVCa'an* であるのに対し、中間態の過去分詞が *CVVCVI* である可能性を示している。また、私の辞書作りに参加した別の学生は、次のような説明をしてくれた。「*paxa'an: estoy haciendo referencia a algo tocado por alguien o por un sujeto, en cambio paaxal: estoy haciendo referencia a algo que tocó por sí solo sin intervención de un sujeto.*」そして、次のような例文を付け加えた。*K'aaxal u k'áat u ya'al u k'axmuba.*「Se ha amarrado' significa que 'se amarró por sí mismo'。つまり、「*k'aaxal* (縛れた) は *k'axmuba* (自分自身を縛った) を意味する。」これらは意味論的にも可能な中間態の事例であり、ブリッカーの事例とも一致する。

上の例文をあげた学生はマヤ語を実際に教えている教師であり、言語学的な知識もかなり持っている。中間態に関して多少誤解した部分があったのかもしれないが、マヤ語話者、ましてやこの学生のような学術的知識を駆使できる者であれば、ある動詞の活用形はすべて言えるはずである。筆者は一連の活用形の中の過去分詞形というある欠けた部分だけを尋ねたのにもかかわらず、その学生は正しい形を提示することができなかった。正しい形を知らないという訳では決してない。正しい形を例としてあげられれば、その意味は分かっても、それがいかなる文法的役割を担ったものなのかを説明できないのである。これはマヤ語に関するユカタンの多くの人の文法的知識が、これまでの文法的枠組みによって依然としてマスクされたままであることを如実に示している。

おわりに — マヤ語話者によるマヤ語文法の領有

本稿ではこれまで、ネイティブのマヤ語話者であってもマヤ語に対する彼らの文法的理解はスペイン語等の西洋言語の論理を流用したものであることを述べてきた。しかも、流用されたものはマヤ語本来の文法規則に成型されるわけではなく、むしろ、流用したスペイン語の文法的枠組みによってマヤ語の文生成規則を理解しようとしている点において、それはスペイン語によるマヤ語文法の領有として理解すべきものである。

では、マヤ語話者が自らの言語の文法規則を説明しようとするとき、スペイン語の文法に照らし合わせた形でしか説明できないことは、今日行われているマヤ語の復興・普及という社会的な事業にどのような影響をもたらすだろうか。マヤ語の文派生規則をマヤ語の論理によって他者に説明することが論理的に不可能である以上、マヤ語文法の解説にどのような言語の論理が用いられたとしても、その違いは結局は相対的なものでしかない。また、マヤ語の復興・普及にスペイン語が介在したとしても、マヤ語が独自の言語として存在する限りにおいて、それは実は大きな問題ではない。使用される文法がマヤ語の固有の論理にどれだけ近いものであるかよりも、むしろマヤ語の学習あるいは教育のプロセスにおいてその文法モデルがどれだけ効率的であるかの方が重要であるだろう。とは言え、文法モデルがマヤ語の固有の論理により近いものであることは、マヤ文化の復興および振興という民族文化的なコンテキストにおいては極めて重要な意味を持つことがあるのもまた事実である。

たとえば、ノラ・イングランドらがグアテマラでマヤ諸語に関する研究を行うにあたって、当該言語のネイティブに言語学に関する教育を行い、彼らに調査研究の一端を担わせたことが、いわゆるマヤ運動と呼ばれる社会運動が起る上で大きなきっかけを提供した (England 2003)。また、メキシコにおいても民衆文化局は先住民文化の研究を行うために言語的知識が不可欠であるという観点から先住民言語話者を積極的に登用した (Lozano Conde 2008)。彼らは今日の先住民言語復興活動の重要な戦力となっているだけでなく、同活動を支えるイデオログでさえある (May May 1993)。現在のユカタンにあってはマヤ語の論理に近い文法がいまだ存在しないだけであり、仮にそうしたものが作られたとすれば、彼らが自らのイデオロギー的実践をより強固なものにするための手段としてその文法を採用する可能性

は否定できない。

現代の言語学的研究が明らかにしてきたマヤ語の文生成規則は植民地時代のものに比べればはるかにマヤ語固有のものに近づいている。だが、そうしたアカデミックな研究の多くは英語で行われ、その成果も学術誌のレベルに留まっていることもあり、マヤ語の復興・普及活動の現場にはなかなか浸透していかないのが現状である。その活動に関わる人々のほとんどは実務者なのであり、手持ちの資源で満足する傾向にあるからだ。だが、アカデミックな最新の知識を反映させた新たなマヤ語文法書が作成されるか、あるいはその基本的概念が彼らにも利用可能な形で入手できるとなれば、話は別であろう。おそらく、そうした教材は遅かれ早かれいずれは作成されるに違いない。そして、マヤ語固有の文生成規則により近い新たな文法をマヤの人々が単に流用するだけでなく、自らのものとして領有しえたとき初めて、マヤ語の復興は成功したと言えるのではなかろうか。

参考文献

- Andrade, Manuel, y Hilaria Maas Collí (recopiladores) . 1991. *Cuentos Mayas Yucatecos*. Tomo II. Mérida: Universidad Autónoma de Yucatán.
- Ayres, Glenn & Barbara Pfeiler. 1997. *Los verbos mayas: la conjugación en el maya yucateco moderno*. Ediciones de la Universidad Autónoma de Yucatán.
- Beltrán de Santa Rosa María, Pedro. 2002. *Arte del idioma maya*. Edición anotada y crítica de René Acuña. México: UNAM.
- Bohnenmeyer, Jürgen. 2004. "Split intransitivity, linking, and lexical representation: the case of Yucatek Maya," *Linguistics* 42 (1) : 67-107.
- Briceño Chel, Fidencio. 2002. "Entre aires y desaires, el despertar del Mayab. El caso de las políticas lingüísticas en la península de Yucatán." *Temas Antropológicos* 24 (2) : 219-238.
- . 2006. *Los verbos del maya yucateco actual: Investigación, clasificación y sistemas conjugacionales*. México: Instituto Nacional de Lenguas Indígenas.
- Bricker, Victoria, Eleuterio Po'ot Yah and Ofelia Dzul de Po'ot. 1998. *A Dictionary of The Maya Language As Spoken in Hocabá, Yucatan*.
- Brody, Michal. 2004. *The fixed word, the moving tongue: Variation in written Yucatec Maya and the meandering evolution toward unified norms*. Ph. D. Dissertation. University of Texas.
- England, Nora. 2003. "Mayan Language Revival and Revitalization Politics: Linguists and Linguistic Ideologies." *American Anthropologist* 105 (4) : 733-743.
- Krämer, Martin and Dieter Wunderlich. 1999. "Transitivity alternations in Yucatec, and the correlation between aspect and arguments roles," *Linguistics* 37 (3) : 431-479.
- Lozano Conde, Alejandro. 2008. "Publicaciones bilingües de la Dirección General de Culturas Populares." *El*

- caracol*. (Organo informativo de la Dirección General de Culturas Populares.) 8: 18-21.
- May May, Miguel Angel. 1993. "Los talleres de literatura maya, una experiencia nueva en Yucatán." en *Situación actual y perspectivas de la literatura en lenguas indígenas*. Carlos Montemayor (coord.), México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, pp. 173-196.
- Nancy, Villanueva. 2008. "La revaloración de la cultura maya en Yucatán." *Temas Antropológicos* 30 (2): 79-108.
- Quintal Martín, Fidelio. 1999. *Curso de Gramática Maya*. Mérida: Ediciones de la Universidad Autónoma de Yucatán.
- San Buenaventura, Gabriel de. 1996. *Arte de la lengua maya*. Edición de René Acuña. México: UNAM.
- Tozzer, Alfred M. 1977 (初版 1921). *A Maya Grammar*. New York: Dover Publications, Inc.
- Verhoeven, Elizabeth. 2007. *Experiential Constructions in Yucatec Maya: A typological based analysis of a functional domain in a Mayan language*. Amsterdam: Jon Benjamins Publishing Company.
- 八杉佳穂 2003. 「マヤ諸語の構造の変化」大角翠編『少数言語をめぐる10の旅－フィールドワークの最前線から』三省堂、63-93頁.
- 吉田栄人. 2009. 「現代ユカタン・マヤ語の動詞活用に関する形態論的一考察」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第16号: 12-25頁.
- Yoshida, Shigeto. 2009. *Diccionario de la conjugación de verbos en el maya yucateco actual*. Sendai: Tohoku University.